

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520285

研究課題名(和文) 想像力の作用を基盤に据えた20世紀以降のジャンル論的批評と物語理論の展開

研究課題名(英文) Development of Genre Criticism and Narrative Theory Since the 20th Century Based Upon the Functions of Imagination

研究代表者

鈴木 聡 (Suzuki, Akira)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：80154516

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：物語言説にかんする理論構築に寄与すべく出発した本研究計画における重要な成果のひとつは、ウラジーミル・ナボコフに代表される20世紀以降の虚構テキストにかんする研究方法の基礎を築いたことである。基本をなすものは、いうまでもなく伝統的な精読の方法であるが、ともすれば旧弊な、時代遅れのものとなされがちなこの方法の実質的効力を実地に証明すべく研究代表者(鈴木)は過去9年ないし10年にわたり研究に携わってきたといえることができる。

いうまでもなく完璧性を企図して自意識的に構築されたナボコフの長篇小説のようなテキストを対象とする場合、研究者・批評家に作者と同様の細心さと網羅性が求められるのは当然であろう。

研究成果の概要(英文)：One of the actual achievements of this project was to outline the basic methodology for studying Vladimir Nabokov's novels in total. Practically speaking, this type of approach, which nowadays is often undervalued and even considered to be out-of-date, can only be substantiated by the simplest act of reading individual works and writing essays treating them one by one, the example of which being the self-imposed mission for the principal investigator (Suzuki) during the past nine or ten years.

In fact, thoughtful analyses of details with view of completeness are essentially requisite for self-consciously constructed artefacts such as Nabokov's oeuvre, and this kind of duality we need must be interpreted as reflecting multiple forms of duality found in Nabokovian texts themselves.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：物語言説 ジャンル 虚構テキスト 想像力理論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者(鈴木聡)が平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号18520177として行なった研究「ヴラジーミル・ナボコフの諸作品を中心として見た20世紀文学・文化研究方法の構築」の成果をとおして、ロシア語文化圏と英語文化圏という二重の立脚点を有するヴラジーミル・ナボコフの知的・藝術的創造行為が、20世紀において人類全体が直面せざるを得なかった難局(個人の自由を死守することの困難さ、個々のイデオロギーや価値観のあいだに横たわる克服しがたい対立)を反映し表象するものであることが解明された。

(2) ナボコフの手になる諸テキストは、20世紀文化の構造そのものが一般的に呈示した認識論上の諸問題を要約するという一面を有するいっぽう、われわれ自身の現時点における世界観のなりたちを照らし出すものともなっている。そこに認められる作者の自意識と、虚構上の語り手の自意識という二層化された言説のありかたは、ジェラルド・ジュネットなどによって提起されたナラトロジーの理論に新たな展開の可能性を賦与するものであるが、同時に、人間にとって、とりわけ現代に生きるわれわれにとって、物語行為がそもそもいかなる意義を帯びたものであるかを考察し、錯綜を解きほぐすための貴重な手がかりをも与えている。このような展望にもとづき、今回、新たな研究計画を抱懐するにいたったものである。

## 2. 研究の目的

(1) 狭義の文学研究、文学批評における精読の方法を徹底することにより、日常的なものを含めた意味における、広汎な物語言説の分析に応用し得るものとするともに、伝統的なジャンルの特性や想像力の役割をめぐる議論を種々のテキスト、種々のメディアにあてはめて再検討しつつ、今日的な意義をもつものとして新たな生命を賦与することを研究の目的とした。

(2) 物語理論は、社会的コミュニケーションという普遍的領野とのかかわりにおいて、認知言語学などの最新の知見を取り入れつつ精緻化し得るものとも考えられるが、いわゆる狭義の文学研究の分野においても、近年、注目すべき理論的展開が生じつつあることは看過できない。すなわち、テリー・イーグルトン(Terry Eagleton, *The English Novel: An Introduction* [2005])、フランコ・モレッティ(Franco Moretti, *The Novel: History, Geography, and Culture* [2006])、*The Novel: Forms and Themes* [2006])などが先鞭を付けているような、古典的、正典的とされる文学的テキスト群の見直しと、一般に長篇小説と称されるジャンル全体の特性をめぐる徹底した再検討である。歴史的、文化的文脈に則してテキストの意味内容を綿密に規定する作業が欠かせないことは言を俟たないものの、比較されるべき対象はよりいっそう多様化し、隣接諸科学から積極的に学ぶべき必要性はますます増大しているといわなければならない。一例を挙げるならば、伝統的な精読の方法を基礎としたテキスト読解は、依然として有効であることは相違ないにして

も、その有用性をさまざまな場面において立証されなければならない。本研究においては、ジュネット(Gérard Genette, *Figures I-III* [1967-1970])やフランツ・シュタンツェル(Franz Karl Stanzel, *Theorie des Erzählens* [1979])によって代表されるような、語り手の機能にかんする従来の諸理論をはじめとして、主として文学的テキストの分析のために案出されてきた解釈装置を他の種類の言説にも応用できないかという点を含め、ジャンル論的批評方法の輪郭を明確化することにより、旧来の各国語文学研究の枠組みを超えて人文科学の諸分野を統合し得る方向性をさぐることも考慮した。また、物語行為が、時によってはすでに過ぎ去ったことごらを再現し、時によってはもともとあり得ないことごらを仮設的に組み立てるという側面を必然的にももなうものであることから、人間の想像力の役割について、とりわけ世界認識の方法としてのその意義について、時間意識や記憶とのかかわりにおいて探究を深める必要が生じてきたことも疑いない。このような見地に立って、20世紀の虚構テキストの典型例として、ナボコフの諸作品について仔細に再読を行なうとともに、その全体像を組み立てることも副次的な目的となった。

(3) 物語行為は、社会的に許容された約束事としての性格を備えているため、なんらかの法則、基準などに束縛されてはじめて成立しているという点を否定できない。その観点から、表現、修辞などの類型性と多様性を踏まえつつ、個々の言説の特異性と共通性を明らかにするという手続きも当然研究構想の一部に組み入れられてよい。しかしながら、そうした個々の言説の起源をなすもの、それらを展開させる根源的な動機となっているものに、まずわれわれは着目しなければならなくなる。そのときに浮上してくるものとは、18世紀末以来(カント、バウムガルテン以来)、哲学、美学、文学理論の中核的な関心の的となってきた想像力の問題にほかならない。ロマン主義や象徴主義などの文藝思潮との関連にとどまらず、この問題は、人間的なあらゆる事象(ことに今日、地球規模で進行しつつある多種多様な破壊と危機)と結びつけて論じられるべきであるが、モダニズムからポストモダニズムにかけての時代においては等閑に付されてきた嫌いがある。書かれたテキスト以外の種々のメディア(多種多様な虚構テキストがそこに含まれる)においても、物語ろうとする人間の欲望がどのようにして具体化、形象化されてきたか、そのさいに話者や創作者の想像力がいかなる貢献をなしてきたかを詳細に吟味することが課題となる。この面においても本研究は領域横断的な一定の貢献をなし得るものである。その成果として、学問的探究の対象が一分野の専門家だけのものではないこと、批評理論や文化理論がけっして一般の人びとの日常的な営みとかげ離れたものでないことを示すことができるのではないかと考えられる。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、研究代表者(鈴木聡)が単

独で遂行する計画であったため、研究代表者のもとになるべく網羅的に基礎資料を集める努力が常時なされる必要があった。学問的重要度の高い文献、最新の文献を優先し、体系的に蒐集することを旨とし、研究の進行にともなって、さらに多方面にわたる資料が必要となった。それらの資料の詳細な読解、分析を徐々に積みかさねつつ、成果となる論文の執筆と研究発表を行なうこととした。

(2)[平成23年度]これまでの研究活動において研究代表者はヴラジーミル・ナボコフの主要な長篇小説について一作品につき一論文ずつ執筆することを企図した。残っている長篇小説としては、未完に終わった作品『ローラのオリジナル』が挙げられるのみなので、今後は主要な短篇小説を対象とした論攷に重点をおき、物語理論の全体的構想につながる出発点とすることとした。それと並行して、1930年代以降における「想像力文学」(Edmund Wilson, *Axel's Castle: A Study in the Imaginative Literature of 1870-1930* [1931] の副題による)の系譜を素描することを念頭におきつつ、今後、取りあげべき他の文学者の作品を選定した。その点で示唆を与えたのは、ナボコフがコーネル大学で行なった講義において取りあげられた19世紀から20世紀にかけての文学作品の一覧である。古典的と呼ぶこともできる諸作品にかんする研究書、研究論文は数多く存在するため、伝記、書簡、日記などの基礎的資料とともに網羅的かつ系統的に入手すべく計画を立案した。以上の点に鑑みて、研究経費中の設備備品費の多くは、図書ならびにその他の資料(映像、音楽なども含む)の購入に充てることとした。資料の保管場所は、東京外国語大学個人研究室、同大学英語専攻共同研究室、および同大学附属図書館とした。

専門分野以外の知見を積極的に取り入れる必要があることから、研究目的達成のために有益と考えられる学会や研究会などになるべく出席することとし、19世紀から20世紀にかけての文学・芸術に関連する専門外の領域については、他分野の専門家に助言を求めることにした。学会に出席する目的で研究経費中の国内旅費を充てる場合があった。資料等の複写にあたっては、著作権にじゅうぶん配慮し、安易に流出しないようにした。

前記したように、日常の主たる研究活動は、文献および資料の精密な分析と、それを集約した結果にもとづく研究成果の公表(論文など)に重点を置くことにした。物語理論は日々着々と進展しつつある研究分野であり、英語以外のいくつかの言語による文献が多く存在することも考えられるので、パーソナル・コンピュータを有効に活用するなどした電磁的手段により、資料整理ならびに研究全般を円滑に進められるよう環境を整える必要がある。最新のソフトウェアの購入にあたっては、研究経費中の消耗品費を充てる。その他の文房具類などについても同様である。パーソナル・コンピュータ上のファイルはUSBメモリ、外付けハードディスクなどに保存し、データの管理を慎重に行なった。

(3)[平成24年度以降]平成23年度と同様、資料の蒐集、分析などの作業を続行し、

さらに高次元の研究を達成目標としてめざした。途中段階においては、研究会、学会等で知見を広める機会を得た。時間の経過にともない、パーソナル・コンピュータならびにその他の機器を、新機能を備えた機種と入れ替えなければならなくなった時点で、新しい機器を導入することとした。資料の蒐集にあたっては、なるべく低廉となるようにし、著作権にはじゅうぶん配慮した。論文等においては、一般読者にも理解しやすい表現方法を工夫した。また、学生や市民に利益を還元し得るよう、将来的には研究成果をより広汎に公表し得る方法を具体化しなければならないため、理論的達成を教育現場において活用する可能性とともに検討課題とすることにした。研究計画の最終段階においては、21世紀における批評理論、文化理論の展開を視野に入れながら、今後の研究の展望を多少なりとも示すことができるようにした。

#### 4. 研究成果

(1)[平成23年度]研究代表者(鈴木聡)は、すでに十年ほどにわたってヴラジーミル・ナボコフの全長篇小説にかんし個別の論攷を発表してきたので、その全体像を念頭におきつつ、これまでの研究方法と主張、今後の研究の可能性の概略を示す目的で論攷を執筆した。本論攷は、2011年5月28日土曜日、早稲田大学にて開催された日本ナボコフ協会大会における特別研究発表の内容にもとづいたものである。

(2)[平成23年度]ヴラジーミル・ナボコフのロシア語短篇小説のうちもっとも早い時期に英語に訳された「フィアルタの春」を取りあげ、この作品における空間ならびに時間の多重性に着目しつつ、その説話構造を詳細に分析するとともに、ロシア語版と英語版の比較をつうじて、作者が、ロシア的なものとヨーロッパ的なものという価値観の対立を作品の根柢に据えていることを論じた。

(3)[平成24年度]ヴラジーミル・ナボコフがコーネル大学において英語で行なったヨーロッパ文学にかんする講義のうち、ジェイン・オースティンの長篇小説『マンズフィールド・パーク』を取りあつかったものを取りあげて、この作品を選んだ理由、経緯なども踏まえつつ、ナボコフ独自の着眼点、用語法などを中心としてその全容を解明した。ナボコフが重要視しなかったこの作品の主題にも言及した。

(4)[平成24年度]ヴラジーミル・ナボコフの初期の短篇小説「ある日没の細部」の詳細な分析をとおし、とくにその写真的、映画的表現方法の特質を論じた。英語訳にあたって作者が表題のうちに用いた「細部」という語が遺憾なく示しているとおり、この作品にあつては、読者が細部を見落とすことない細心な読みを行なうことが前提とされており、細部に配置された色彩、光と影の対比が主題論上の重要性を担っているという点を明らかにした。

(5)[平成25年度]ヴラジーミル・ナボコフがコーネル大学において英語で行なったヨーロッパ文学にかんする講義のうち、チャールズ・ディケンズの長篇小説『荒涼館』をあつかったものを取りあげ、この作品が選

ばれた経緯，事情などにも配慮しながら、主にナボコフ固有の問題設定にもとづいてこの長篇小説の全文を解明した。ナボコフが重要視していない主題論的考察も試みた。

(6)[平成25年度]ヴラジミール・ナボコフの後期の短篇小説「ヴェイン姉妹」を取りあげ、この作品の解釈にかかわる重要な仕掛けに触れながら、匿名の語り手の主観的視点ならびに思考に他者の意志が介在していることを示唆するテキストの機構を解明した。ナボコフが長年にわたって心霊主義にたいして密かな関心をいできてきた可能性と、その意味するところについても考察した。

(7)[平成26年度]ヴラジミール・ナボコフがコーネル大学で行なったヨーロッパ文学にかんする一連の講義のうち、ギュスターヴ・フローベールの長篇小説『ボヴァリー夫人』をあつかったものを取りあげ、文学史上においてこの作品の占めている位置にかんするナボコフの認識、「層の主題」、対位法的手法にかんする分析などを踏まえつつ、この作品のなかでもとりわけきわだっている、場面から場面、話題から話題への移行の方法を詳細に論じた。

(8)[平成26年度]ヴラジミール・ナボコフの未完に終わった長篇小説『ローラのオリジナル』(1977年、2009年出版)について、残されているカードからその全体像を見とすべく詳細に検討を加えた。原型が模像に遅延して立ち現われるという主題とポスト構造主義以降における哲学、批評理論の動向(ジャック・デリダなどに代表されるもの)との微妙な照応関係、ナボコフの晩年の愛読書であったダンテの『神曲』との関連などにも触れた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8件)

鈴木聡、断片と模像—ヴラジミール・ナボコフの『ローラのオリジナル』、東京外国語大学論集、査読無、第89号、2014、217-241

鈴木聡、移行と停滞—ヴラジミール・ナボコフの『ボヴァリー夫人』論、東京外国語大学論集、査読無、第88号、2014、257-281

鈴木聡、指標と伝言—ヴラジミール・ナボコフの「ヴェイン姉妹」、東京外国語大学論集、査読無、第87号、2013、121-144  
[http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/77194/1/acs087007\\_ful.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/77194/1/acs087007_ful.pdf)

鈴木聡、霧と変化—ヴラジミール・ナボコフの『荒涼館』論、東京外国語大学論集、査読無、第86号、2013、107-130  
[http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/73469/2/acs086008\\_ful.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/73469/2/acs086008_ful.pdf)

鈴木聡、偶然と色彩—ヴラジミール・ナボコフの「ある日没の細部」東京外国語大学論集、査読無、第85号、2013、295-314  
[http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/72384/2/acs085014\\_ful.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/72384/2/acs085014_ful.pdf)

鈴木聡、虚構と構造—ヴラジミール・ナボコフの『マンスフィールド・パーク』論東京外国語大学論集、査読無、第84号、2012、219-240

[http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/70852/2/acs084012\\_ful.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/70852/2/acs084012_ful.pdf)

鈴木聡、回想と解離—ヴラジミール・ナボコフの「フィアルタの春」、東京外国語大学論集、査読無、第83号、2011、163-184  
[http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/69480/2/acs083008\\_ful.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/69480/2/acs083008_ful.pdf)

鈴木聡、ヴラジミール・ナボコフの長篇小説—その陰翳と紋様、日本ナボコフ協会『KRUG』、査読有、4号、2011、30-47

[学会発表](計 1件)

鈴木聡、ヴラジミール・ナボコフの長篇小説—その陰翳と紋様、日本ナボコフ協会大会、2011年5月28日、早稲田大学(東京都)

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木聡 (SUZUKI, Akira)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授  
研究者番号：80154516

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：